

今日も何気なく

「ただいま」と

お姉ちゃん、お兄ちゃん、ばーばが帰宅する。

「おかえり」と、ママと弟が迎える。

「ママあのね、今日ね、泥んこ遊びしたんだよ」

「わあ、汗いっぱい。着替えなきゃ」

ばーばが二人の着替えを手伝う。

「見て見て、卵も全部食べたの」

と、卵の苦手なお姉ちゃんが

空っぽのお弁当箱を持ってママのところへ。

「ほんとからっぽだ。頑張ったね」

ママはにっこり笑って

お姉ちゃんの頭をなでる。

「僕も」

お兄ちゃんも空っぽのお弁当箱を持って

ママのところへ急ぐ。

着替えは途中のままだ。

「本当だ、すごいね。えらいね」

ごく当たり前に繰り返される毎日の光景。

家族との時間。

先の東日本大震災では、

その当たり前の日常が奪われました。

家族の絆の大切さを再認識させられた今こそ、

「家族」を考えます。



●特集

家族

家族の温かさはどこへ

おかえり Family

自分が一番大切なものを考えたとき
ふと誰もの心によみがえったのは「家族の温かさ」。
家族の元に帰れば、ほっと力が抜けたり
安心して本音が言えたりするのはなぜでしょう。
「おかえり」をキーワードに探ります。

山積みの課題

家族―。
人がこの世に生まれてから
続く、最も基本となる単位で
す。

かつて多くの日本人は大家族の中で育ち、おじいちゃん、おばあちゃんなど年長者の暮らしぶりや立ち居振る舞いなどから、人として大切なことを学んできました。

そうした家族の風景は、高度経済成長が始まった昭和30年代以降変わり始めました。農村から都市への人口移動に伴い、都市部を中心に核家族世帯が増加。その後も経済的に豊かになる中で、少子高齢化や晩婚化、晩産化が進み、結婚や家庭に対する意識は多様化。結果、核家族世帯、夫婦だけの世帯や単身世帯が増えてきました。

1世帯当たりの平均人数は、昭和30年ごろまでは5人前後で推移していましたが、平成22年には2・46人まで減少。人口が増加から横ばいへと転じた一方で、世帯数は増えています。

一つ屋根の下で暮らす家族

であっても、テレビゲーム、携帯電話やパソコンなどが普及し、個がより重視されるようになり、家族で過ごす時間は「家族サービス」などという言葉に象徴されるように、わざわざつくらなければならぬものになってしまいました。



内の事件に触れるたび、家族が崩壊してしまったかのような気持ちさえ抱きます。

震災後の変化

先の東日本大震災によって、私たちはたくさんものを失いました。その一方で、「家族の絆」の大切さを再認識させられました。

震災や原発問題を通して、「家族」や「ふるさと」に、かつてないほど向き合いました。仕事中心の生活から、家族との時間を大切に行っている人が多くなりました。震災をきっかけに結婚を決断した「震災婚」という言葉も登場しました。

震災以前の日本は、「核家族化」「育児放棄」「DV」「帰宅拒否症」など、家族を取り巻くキーワードの大半がネガティブな響きの言葉ばかり聞こえる時代になりました。それでも、震災を機に、それぞれが自分にとって一番大切なものを考えたとき、すぐに浮かんだのは「家族の温かさ」ではなかったでしょうか。



「他の誰かじゃだめなんです」
吉川昇吾さん(27) めぐみさん(27)
仁瑚ちゃん(1) (恵久美)

せん。

「ただいま」

仁瑚ちゃんはすぐに昇吾さんの元へ。

仁瑚ちゃんのにっこり笑顔、めぐみさんの温かい「おかえり」に、昇吾さんの疲れ

は吹き飛び、心は安らぎます。今年3月までは、別の職場で働いていた昇吾さん。忙しい時間が無い上に、夜勤もあるという大変な仕事でした。

「いつもしんどそうで見ているほうもつらかった」と



振り返るめぐみさん。どんなに帰りが遅くても、起きて待つていました。そんなめぐみさんの愛情が、家族の絆を深めていました。

「何も言わなくても、居てくれるだけでいいです。安心するんですかね。何か喋りたくなったら聞いてくれるし、絶対に味方でいてくれる。他

の誰かじゃだめなんです」

昇吾さんにとって、家族はかけがえのない存在。

「家に帰って、一緒に夕食を食べる。当たり前前のことだけど、今、最高に幸せ」とほほ笑む昇吾さん。三人をつなぐ「おかえり」には、愛情、信頼、安心があふれています。

「家族の支えがあるから頑張れます」



大下和也さん(35) 綾子さん(36)
凛斗くん(小2) 璃音ちゃん(2)
(西高柳)

反対に夜勤明けに帰ると、旦那が朝食を作っておいてくれたこともありました。その優しさがうれしくて」と綾子さんは幸せそう。

夫婦が仕事のときは、近所に住む綾子さんの両親が子どもの世話を助けてくれていました。

「先日、璃音が水ぼうそうにかかって。1週間は休まなくちゃいけなかった。でも、主人も私も仕事が終わらない。両親に見てもらって本当に助かりました」と感謝します。

璃音ちゃんの保育園の送り迎えは綾子さんの担当。でも、和也さんが休みのときは和也さんがしてくれます。他にも、洗濯をしてくれたり、時々ご飯も作ってくれたり、協力的です。そんな両親や祖父母の姿を見ている子どもたち。できることは自分で頑張っています。

「周りの理解がなければやっていけない仕事だなんて感じていません。家族の支えがあるから頑張れます」

綾子さんの家族には、言葉ではない「おかえり」があります。そこには、助け合い、支え合う家族の姿がありました。



看護師として松山市の病院に勤務する大下綾子さん。小学2年生の凛斗くん、2歳の璃音ちゃんを持つ、2児の母です。

今でこそ、育児のため短時間勤務をしています。璃音ちゃんが生まれるまでは、夜勤のある3交代勤務。夫和也さんの

心の居場所

話を聞いた2組の家族。家族間の「おかえり」の中には、愛情、信頼、支え合い、助け合いや安心がありました。それは、「家族」に欠かせないかけがえのないもの。

震災で子どもを亡くした親が、ニュースで「もう一度だけいまという声を聞きたい」と話す場面がありました。当たり前の毎日などないのかもしれない。身近な宝物に気付いていますか？

次の手紙は、今年9月25日から10月1日まで、小学生が家族と離れて暮らす「まさきっこチャレンジ合宿」で、最終日に親から子宛てられた手紙の一部です。1週間も家族が離れるのは、子どもにとっても親にとっても初めてのことで、親は、「おかえり」と言って迎える子どもがいない中で何を考えたのでしょうか。そこには、先の2組の家族同様、いつの時代も変わらない「家族に欠かせないもの」がありました。

家族の「おかえり」にほっとするのは、心の通う「心の居場所」だからです。

●まさきっこチャレンジ合宿 親から子への手紙より

「私の大切な子どもへ」

ひなたへ
正直寂しかったでしょう。でも、寂しい思いをしたのはひなただけではないですよ。お父さんはひなたの「おかえりー」の声がないさみしさ。お母さんは食事や洗濯の時、ひなたの分が足りないさみしさ。しおんは何をするにも一人でしないといけないさみしさがありました。でもみんな寂しさを乗り越えて強くなったと思います。 谷口純子

志晃へ 清斗へ
お母さんはきっと兄ちゃんが助け合いができるやさしい兄ちゃんになっていると思います。清くんはやさしい子だから、ちゃんとできたと、お母さんは思っています。知花もお母さんもすごくさみしかったし、困ることもいっぱいありました。帰ってきたら、二人でお母さんを助けてね。 青井由香

あやちゃんへ
あやちゃんが「合宿行きたい」っていった時、ママは少しびっくりしたよ。のんちゃんがさみしがるのはもちろんだけど、それよりもママのほうが寂しいって、あやちゃんはきっと思いもしないかな。ママはがんばっているあやちゃんをずっと見ているよ。時々甘えていいからね。 壬生美央

あーちんへ
おうちでは、火曜日の朝、じいちゃんがポツリ…「あかりは何しよるかな…」とつぶやきました。あーちんとじいちゃんとママの3人がそろって家族なんだとあらためて思いました。 渡部文

明楽くんへ
お母さんは明楽といるとすごく楽しい気分になります。嫌なことがあっても、明楽と話していると落ち込むのがつまらない事のように思ってきます。明楽はお母さんや、まわりの皆に愛情を返してくれています。ありがとうございます。私は明楽くんのお母さんになれてうれしいよ。 岩崎みさか



「ほっとけんかったんよ」
塩見静子さん(87) (神崎)
紺堂詩織ちゃん(小4) 光咲ちゃん(小2)



もう一つのおかえり Community

核家族が増え、共働き家庭が増える現代。
「家族」だけでは「おかえり」が、満たされません。
それが、地域コミュニティーという身近な場所での
「もう一つのおかえり」。
2組の家族を紹介します。

「ばあちゃんのしわしわの手が大好き」と手を取り合う紺堂詩織ちゃん。光咲ちゃん。二人がばあちゃんと呼ぶ塩見静子さんは、本当の祖母ではありません。両親が共働きの二人。母智美さんの紺堂仕出し屋が静子さんの塩見商店の隣だったことがきっかけで、静子さんが二人の面倒を見ることになりました。

智美さんは「詩織をベビーカーで店に連れて行ってました。詩織は泣いてばかりだけど仕出し準備もしなくちゃいけない。どうしたらいいかわからないでいたときに、お店をのぞいたばあちゃんが『見

とくよ』って。涙が出るほどうれしかった」と振り返ります。静子さんは「かわいい顔くしゅくしゅにして泣いとるのを見たらほっとけんよ」とにっこり。以来、詩織ちゃん、妹の光咲ちゃんも静子さんが子守りをしました。

「上の子を乳母車に入れて、下の子をおんぼして店番したもんよ」

静子さんの子守りで大きくなった二人にとって、静子さんはかけがえない存在です。「敬老の日には私にもプレゼントしてくれるんよ。この子ら器用よ。これ」と袋のリボンを指さす静子さん。プレゼントの袋も大切に飾っています。

智美さんの職場が変わった今でも、週に1度の集団下校日は静子さんのお店に帰る二人。水曜日、15時になると、「そろそろか」と店の入口を見つめる静子さん。

「あの子らは後ろのほうからとこと帰ってくるんよ」

二人のことは誰よりもよく知っています。「帰った帰った」という静子さんの優しい言葉のすぐ後に、「おばあちゃんたいまー」と元気な二人の声が店に響きます。

「はい、おかえり」

2軒の店の絆が生んだ「おかえり」は、家族の「おかえり」と同じようにすてきです。

松前小学校で、新1年生になる保護者を対象に「子育てについて」講演をする笹山さん



自宅の習字教室。習字以外にも得るものが多いこの場には、地域の心の居場所として大勢人が集う



主任児童委員の先輩ママに聞く

子どもを抱きしめていきますか。

今、全国で虐待についての相談件数が増加しています。相談者の中には「私も親にたたかれて育ったから、どうしたらいいかわからない」という人がいます。

子は親を見て育ちます。子どものときの環境が、自分が親になったときに影響することだってあります。「ただいま」といったら「おかえり」と聞こえる家で育った私は、自分もそういう家族をつくりたいと思ってきました。もし「おかえり」が言えないとしても、「おかえり」と書いたメモを置くなどの工夫はできます。ものじゃなくて、お金じゃなくて、愛情をもらった記憶は人の心に残ります。子どもの頃に感じた肌の温もりは、優しさや思いやりを教えてくれます。

幼稚園や保育所の子どもたちは、親の迎えを今か今かと待っています。なのに「はよ靴はいて、遅れる」などと言っていないですか? 「おかえり」「ぎゅっ」が先です。低学年の子どもなら、無事に家に帰っただけでも「おかえり。えらかったね」と褒めて抱きしめてあげてください。

高学年になると、人に甘えを見られるのが恥ずかしい子もいるでしょう。中学生、高校生になれば、運動会でさえも「見にこんとって」と言うかもしれません。でも私は行きます。私の子ですから。影からでもいいから、そっと見てあげてください。子育ては大変です。でも、人任せにしたり、投げ出したりできるものではありません。ずっと見守ってあげてください。

ときに親は、子が言うことを聞かず「あなたのためにしてるのになんで」と言います。でも、子どもは子どもなりに親の顔を見ています。例えば、帰って来ないからごはんを作らないじゃなくて、ごはんを作り続けてください。「あなたのために作っている」と見せて、帰る場所をつくってあげてください。非行に走るの、心が寂しいからです。ものじゃありません。自分の心の居場所を探しています。自分を認めてくれる人、分かってくれる人を探しているんです。目の前の子どもが悩んだら、まず抱きしめて、そして話を聞いてあげてください。

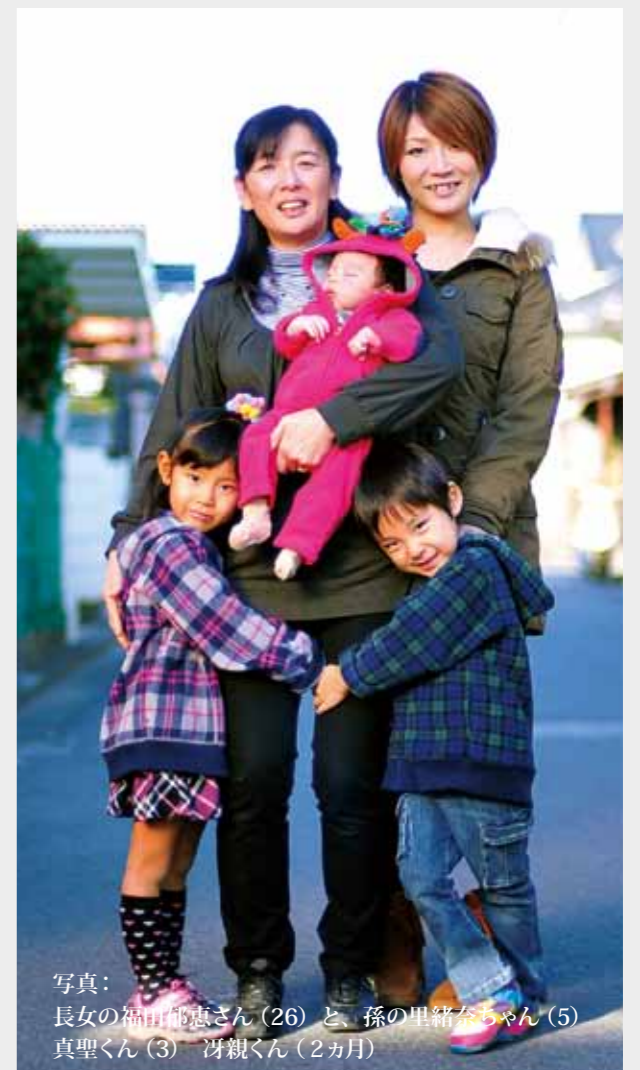


写真: 長女の福山由恵さん(26)と、孫の里緒奈ちゃん(5) 真聖くん(3) 淳親くん(2ヵ月)

笹山伊智代さん

松前町主任児童委員 (49) 筒井

現代が生んだ「おかえり」
ファミサポは、かつての地縁機能に代わる相互援助活動を組織化したものです。昔はどこにでもいたおせっかいおばさんと、地域とのつながり方が分からない家

域で「おかえり」を補ってらつて2組の家族。そこには、昔ながらの付き合いや温かい人情が残っていました。かつては大家族主体で、親の面倒や子の面倒は家族が見ていました。また、家族が困れば、近所で手伝うのはごく当たり前の光景でした。「おかえり」は近所で補えたのです。ところが、家族は多様化し、地域コミュニティは希薄化し、近所で支え合う機会は減ってしまいました。機会が減れば減るほど、地域とのつながり方が分からない家族が増えていきます。

塩見さんと紺堂さんのように隣近所が協力して子育てをしている関係は、今ではほとんどありません。そこでできたのが、藤岡さんと山地さんが利用しているファミサポでした。

ファミサポは、かつての地縁機能に代わる相互援助活動を組織化したものです。昔はどこにでもいたおせっかいおばさんと、地域とのつながり方が分からない家

域で「おかえり」を補ってらつて2組の家族。そこには、昔ながらの付き合いや温かい人情が残っていました。かつては大家族主体で、親の面倒や子の面倒は家族が見ていました。また、家族が困れば、近所で手伝うのはごく当たり前の光景でした。「おかえり」は近所で補えたのです。ところが、家族は多様化し、地域コミュニティは希薄化し、近所で支え合う機会は減ってしまいました。機会が減れば減るほど、地域とのつながり方が分からない家族が増えていきます。

塩見さんと紺堂さんのように隣近所が協力して子育てをしている関係は、今ではほとんどありません。そこでできたのが、藤岡さんと山地さんが利用しているファミサポでした。

西岡 ファミサポの始まりは中野さんやったね。「子どもを見たいんです」って来て。中野 私自身、子育てに苦労して、子育ての先輩に助けられたから。頼る人がなくて悩む家族を助けたくて。西岡 そのあと、子育て支援センターに「子どもを見てほしい」と相談があつて。仕事で見られないんじゃないかと、いろいろな事情で見られないお母さんだった。そのときに中野さんを思い出して橋渡し。それが始まり。今のファミサポになったのは平成13年から。中野 手探りのスタートだったよね。決してみんなが肯定的ではなかった。人の子を預かって、お金もらうなんて。西岡 「昔は子どもほついても近所で遊びよつたんやけん」ってね。でも、時代とともに社会は変わる。世間は安心安全を求めている。高木 実際、悩んでいるお母さんはいっぱいいるよね。働かないとやっていけなかったり精神的な問題を抱えてたりする時代よね。西岡 働く家庭の援助だけでなく、家庭で子育てをしているときの援助、いろいろあるよね。高木 近所での子育てもファミサポも家族の一人を、一つの家庭を大事に支えるというのは変わらないね。困っている家族がいたら、じっくり話を聞いて、どう寄り添ったらいいかを考える。西岡 今は近くの人と関係がつかない人もいる。子どもにとって親ではない第三者の大人との関わりはすごく大切。中野 子どもを預けたお母さんの中には後ろめたい気持ちになる人もいる。でも一時、自分から離すことで子どもを見

つめ直すことができる。迎えに来るとき「早く会いたい」と走ってくるお母さんも…。高木 サポーターさんは身近で頼れる存在。家族と保育行政の隙間を埋める存在だと思う。そして何より子どもが大好きで、子育ての大先輩。助かった人がたくさん。サポーターさんは松前の母・おばあちゃんかな。西岡 でも、料金が発生することで中には利用しづらい家庭も。ファミサポに頼るだけでは、完璧に隙間を埋めることはできないね。高木 援助の相談のときには、どんな援助が必要なのかお母さんたちのSOSの声を傾ける。お金もかかることなので、身近な人の中に子育てのサポートができる人がいないかももう一度一緒に探してみるのもコーディネーターの役割。困ったときは遠慮なく声に出してほしい。中野 「家族」の中で悲惨な事件が起きる現代だけど、いつの時代も子どもは地域の宝物。子どもは誰もが愛情を注がなきゃ。それから、親が元気でなければ子どもも元気になれない。おせっかいと言われるかもしれない。でも、かつて日本にいた近所のおせっかいおばさんのような存在でありたいと、この仕事を始めたときから思ってた。サポート最終日、泣いてくれた子がたくさんいる。お母さんも、こんなうれしいことある？「おばちゃんこれで最後じゃないけん」って言って私も泣いた。お父さんお母さんにはなれないけど、安心できる心の拠り所でありたい。親子に寄り添うのが私たちの幸せ。

族をサポートすることで、家族と地域のつなぎ役をしています。現在、サポート会員は34人。すでに登録をした利用会員は500人を超え、年々依頼の数が増えています。それはつまり、おせっかいおばさんになりたい人、おせっかいおばさんを求める人、そして、地域とのつながりを求めている人がたくさんいるということ。そして、制度を利用しなければならぬほど、地域とのつながりをつくるのが難しくなったことを意味します。

元コーディネーター(宗意原保育所長) 西岡真理さん

ファミサポに込める思いをコーディネーターとサポート会員に聞く

高木結香さん

サポート会員 中野三千代さん

「居心地がいいんだらうなと安心しています」



山地清夏さん(29) 航くん(3)
佳乃ちゃん(1) 藤岡智文さん(54)



(筒井)

「おばちゃん、おはよう」「おはよう。待ってたよ航くん、佳乃ちゃん。今日も一緒に遊ぼうね」
航くんの元気なあいさつからファミサポサポート支援は始まりました。ファミサポは、地域で育児について援助を受けたい人(利用会員)と援助を行いたい人(サポート会員)が会員登録して、助け合う制度です。
航くんと佳乃ちゃんはまるで近所の親戚の家に遊びに来たかのように。佳乃ちゃんは嫌がることなくサポート会員の藤岡智文さんに抱っこされます。
智文さんにサポートをお願いしているのは、山地清夏さん。月5日の勤務日に、智文さんの家に二人を預けます。
智文さんは「預かるときは、ケガのないようにと責任を感じますが、やっぱり子どもと過ごす時間は幸せです。お母さんにその日の出来事を報告しながらお話しするのも楽しい」とうれしそう。
山地さんは「仕事が終わって迎えに行くとき、泣きながら駆け寄ってくるわけでもなく、にっこしながら『おかえり』って言う航くん、藤岡さんの腕の中でぐっすり眠っている佳乃を見ると、『居心地

がいいんだらうな』と安心していきます」とにっこり。子どもたちをきっかけに、二人は自然に信頼関係を深めています。
智文さんが会員登録したきっかけは、「自分の子育てのときに、たくさんの人に支えられてきました。今度は私が、少しでも地域の家族のお手伝いできたらと思う」と、照れくさそうに話します。
一方、清夏さんは、「主人も私も両親が近くにいないので、頼れる人がなくて。一時保育も考えたけど、ただでさえ親が仕事して子どもが不安定なのに、集団保育は心配で。その点ファミサポは家族のように見てくれるのがいいなと思って」と話します。
智文さんの家は、清夏さんの家から近いところにあります。清夏さんは、「身近な地域で子どもを見てくれる藤岡さんは、何でも相談できる近所の親戚のような存在です。藤岡さんに出会う前と今では安心感が違います。子どもたちが大きくなったら、私もサポート会員として誰かの家族を手伝いたい」と微笑みます。
子どもたちをきっかけに生まれた「おかえり」には、地域の信頼や温かい心の広がりが見えます。

みんな誰かの おかえりの場所に Hometown

当たり前家族と過ごす毎日の尊さ、「おかえり」のある尊さに気付いていますか。

「おかえり」には、愛情、信頼、支え合い、助け合い、安心や思いやりが入っています。

そういう「おかえり」で育った心は、地域に帰ってきます。

白血病と闘った河合凌太郎くん(小5)。2歳3カ月のときに発病。家族の愛に見守られながら、つらい抗がん剤治療を乗り越えました。今は、皆勤賞をとるまでに元気になり、「まさきっこボランティアセンター」で地域のために活動しています。

妙子さんの手編みの帽子をかぶって。凌太郎くん2歳7カ月のとき



かけがえない家族の誕生

「凌太郎が生まれたとき、病院の窓から見える土手の桜が満開でね。きれいだなーって思ってた」

平成13年4月1日4時1分。凌太郎くんは生まれました。3725グラム。体だけでなく、泣き声も大きな子どもでした。

「他の子が泣くんでって新生児室から返されて。私のベットの横にいて二人でお花見気分でした」
よく笑いよく泣く凌太郎くん、家族の誰もが癒されました。

白血病と診断

凌太郎くんが2歳3カ月の時、家族に衝撃が走ります。海で元気に遊んだ日。家に帰り、凌太郎くんの様子がおかしいことに気付いた妙子さんは、救急病院へ急ぎました。病院で待っているときに、針でつついたように出血斑が全身に出て、お腹が膨らんでいました。

「結果が出る前から、何か悪い病気だと思った」

妙子さんの不安は的中。「すぐに県病院に行ってください」と促されました。そのまま真夜

中の県病院へ。

「小児白血病です」

医師から告げられた病名に家族は皆、頭の中が真っ白でした。

一つのベッドで毎日抱きしめて

検査の結果は「急性リンパ性白血病」。2万人に1人の病気で、あること、リンパ性は白血病の中でも一番治る確率が高いことなどの説明がありました。治る確率が高いと言われても、不安は募るばかりでした。

小さい凌太郎くんのため、妙子さんも一緒に入院。一つのベッドで、毎日凌太郎くんを抱きしめて眠りました。真吾さんは仕事帰りに必ず駆け付け、おじいちゃんおばあちゃんも毎日見舞いにきました。ばあちゃんは遠い県病院までの道のりを自転車できたこともありました。

そんな家族の愛に見守られながら抗がん剤を投与するつらい治療が始まりました。つらさに堪えかねて泣き叫ぶ凌太郎くんを見て、真吾さんは何度も心の中で「代わってやりたい」と願い、じいちゃんは「大丈夫、絶対直してやるからな」と誓いました。

薬は、オプラートに混ぜて注射器に入れて飲ませました。苦い薬に凌太郎くんは暴れまわって拒否。看護師は皆、その暴れように戸惑いました。

「私にしかできない」
妙子さんはベッドに凌太郎くんを寝かせ、上から押さえつけて飲ませました。最後まで妙子さんにしかできませんでした。9カ月間、妙子さんは凌太郎くんに寄り添い続けました。

妙子さんのたくさんの友人も、心配して見舞いに駆け付けてくれました。「大丈夫だよ」と声を掛けてくれる友人たち。あんなに不安だった気持ちには、不思議なほどに消えていきました。

家族の愛に動く

定期的な寛解治療を繰り返しながら、凌太郎くんは順調に回復。15年3月、幼稚園の入園目前の春に退院。「みんなに見せる」と言って、凌太郎くんは幼稚園の制服を着て病院を後にしました。

幼稚園の入園のときも、妙子さんは奮闘しました。白血病の子どもの入園を多くの幼稚園に断られていたのです。

「凌太郎頑張っているのに」
エンゼル幼稚園のクラス役員決めるとき、妙子さんは全保護者に言いました。「うちの子は白血病です。皆さんに知ってもらいたくてお話します。私も幼稚園での凌太郎の様子を見たいので、私、役員します」と。保護者も先生も、誰も断りませんでした。

元気に駆け回り、すくすく成長した凌太郎くん。白血病に「完治」はありませんが、退院して5年すれば「寛解」といわれます。これは、発病しないということと意味します。その寛解から3年。凌太郎くんは幼稚園を二度も休まず卒園し、小学5年生の今、学校を休んだのは1日だけです。

今度は僕が助けたい

凌太郎くんは今、ボランティアに取り組んでいます。4年生の時、「いきいきまさきっこボランティアの募集」を見て「やりた」と二言。凌太郎くんはずっと思っていたことがあったのです。

「僕は病気になって苦しんだけど、みんなに助けてもらって今は元気になった。だから今度は

は、苦しんでいる人を僕が幸せにしてあげたい」

いきいきまさきっこボランティアではさまざまな活動に参加しています。ひまわりの種植え、川清掃、まさき文化祭ではフライドポテトを販売しました。

「凌太郎がやりたいことは、何でもやらせてあげたいと思っています。どんな地域に出て、いくら妙子さん。地域で生き生きと活動する凌太郎くん。文化祭の日、そんな凌太郎くんを陰で見守っている妙子さんの姿がありました。ただ何でもやらせるのではなく、いつもそとで見守る妙子さん。そんな妙子さんがいるからこそ、凌太郎くんは積極的に地域に出ていきます。

生まれてきてくれてありがとう

昨年、凌太郎くんもチャレンジ合宿に参加しました。最終日には妙子さんから「私の大切な子どもへ」と題して手紙が送られました。そこには凌太郎くんが涙し、心に刻んだ言葉があります。

「小さな子やまわりの人にや

通学合宿中、妙子さんから凌太郎くん宛てられた手紙



「生まれてきてくれてありがとう」

さしくできる凌太郎をお母さんは、ほこりに思っています」

自分が誰かにとつてかけがえの存在であると感じれば、誰だつてうれしくなります。見守ってくれていると感じれば安心します。認めてもらえれば、それだけで生きる力になります。

妙子さんは、凌太郎くんが生まれてから1日も欠かさず続けていることがあります。それは、「生まれてきてくれてありがとう」と凌太郎くんを抱きしめる

こと。そこには言葉ではとても表現できないほど大きな家族の愛があります。この話を聞く前に、凌太郎くんに妙子さんの好きな所を尋ねていました。恥ずかしくもない表情を見せた凌太郎くんの口から出た言葉は「毎日抱きしめてくれるところ」でした。

思いやりの心は思いやりを受けて育ちます。凌太郎くんに注がれ、育まれた思いやりの心は、地域に帰ってきています。

河合妙子さん(43) 凌太郎くん(小5)



家族の「おかえり」の尊さに
 気付いていますか
 地域の「おかえり」の大切さを
 知っていますか
 あなたが「おかえり」と
 言える場所を持つということは
 誰かの「ただいま」と言える場所を
 つくっているということ
 さあ、
 「おかえり」でつくる
 家族のようなまちへ

幸せな地域づくりの 原点がここにある

愛情、安心、信頼、支え合い、助け合い、思いやりなど、
 いろいろな温かさが詰まった「おかえり」。
 そういう「おかえり」で育まれた心は地域に帰り、
 やがて地域は「おかえり」でつながっていく。

家族間の「おかえり」。地域
 コミュニティーという身近な場
 所での「おかえり」。どちらの「お
 かえり」にも、愛情、安心、信頼、
 支え合い、助け合いや思いやり
 などが入っています。凌太郎く
 んに代表されるように、そうい
 う「おかえり」で育まれた心は、
 地域に帰ってきます。やがて地
 域は「おかえり」でつながって
 いきます。それは、「みんなが
 誰かのおかえりの場所」になる
 ということ。

どんなに社会が変わっても、

いつの時代も家族はかけがえの
 ないもの。家族と過ごす毎日の
 時間は、当たり前ではありませ
 ん。家族の「おかえり」の尊さ
 に気付いていますか。家族みん
 ながこのまちで幸せに暮らすた
 めに、今、家族に対してあなた
 は何ができますか。

仕事で子どもの帰りを迎えて
 あげられないお父さん、「おか
 えり」は言えなくても、ぎゅつ
 と抱きしめることはできます。
 お母さん、「おかえり」と一言
 添えてごはんを置いておくこと
 もできます。

また、どんなに居心地のいい
 家族ができて、それらを取り
 巻く地域の環境が温かくなけれ
 ば、決して安心して暮らすこと
 はできません。

地域の「おかえり」の大切さ
 を知っていますか。地域に対し
 てあなたは何ができますか。

地域の皆さん、下校している
 子どもたちに「おかえり」と声
 を掛けてあげてください。

あなたが「おかえり」と言え
 る場所を持つということは誰か
 の「ただいま」と言える場所を
 つくっているということ。

幸せな地域づくりの原点は、
 幸せな家族づくりにあります。